

# Library News

図書館だより No.40  
Nara National College of Technology

1996年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



## 目次

巻頭言 初春の夢	図書館長 中和田 武	1
退官された先生からのメッセージ		2
読書感想文コンクールを終えて		3
入選作品の紹介		4
読書週間—戦後50年、日本の今を考える—を振り返って		10
	図書部会長 井村榮仁	10
ブックハンティングの謎		11
お知らせ		11

*Handwritten signature and date:*  
Mura  
Dec. 25 '92

(松尾寺・本校名誉教授 石垣 昭先生スケッチ集より)

## 初 春 の 夢

館 長 中 和 田 武

本校図書館は、本校建学の理念を達成し、学生・教官の学習、研究をより効果的に推進するために、十分な機会を提供するとともに、本科・専攻科の要求に対応すべく図書館資料を収集、充実することを第一の使命としています。多面的、かつ的確な情報検索システムを駆使して、貸出業務、参考調査業務を行い、利用者が本校の図書資料はもとより、国内外の資料を活用していただけるようサービスに努めています。また、本校の図書館は、奈良県下で工業系学術図書資料の充実した唯一の図書館であり、なおかつ市内においては、蔵書資料の最も豊かな図書館でもあります。このようなことから本校図書館は、学外の利用者に対しても可能な限りの対応を行うことができる図書館として位置づけることができます。

最近では、各国立大学をはじめ各高専においても図書館の一般公開が進められていますが、本校においても、一般市民の生涯学習への欲求や民間企業等の学術資料入手要求に対応すべく検討した結果、平成8年4月8日より図書館を一般公開することになりました。一般公開についての詳細は、「CAMPUS」No.72に掲載しましたので、ご覧下さい。

図書館委員会では、一般公開を契機に図書館の将来構想を描きました。その一つは、教官の研究業績コーナーの新設です。このヒントは、図書館だよりNo.37の「卒業生からのメッセージ」と、全国図書館大会でのある高専校長の談話です。機械工学科卒業生の豊田さとみさんのメッセージは、「幅広い知識や一般教養を身につけるため、また自分の興味ある事を見つけ、追究し、楽しむため、そのような手段の一つとして図書館の利用をお勧めしたい」と述べています。また、彼女が入学した大学の図書館でのことですが、「大学図書館の中で、本校教官の紀要1965～1992（注一紀要とは、本校の先生方の研究成果を収録した論文集）という数冊の本を見つけた。卒業して初めて、専門や一般の先生の研究を知り、このような研究をされていたかと大変驚きました」と語っています。このことは、学生諸君に在学中一度は先生方の研究紀要を読むことを勧めて下さっています。研究紀要は図書館にコーナーを常設していますので、一度は目を通してほしいと思います。今、習っている先生が、一段と輝いて見えることでしょう。今後、これに加えて先生方の著書や学位論文等も収集し、学生諸君は持論のこと、学外の利用者にも閲覧いただきたいと思っています。そしてそのことによっても、本校を評価していただこうと思っています。

二つ目は、図書館の増築及び設備の充実をはかることです。試験前になると混雑して図書館内で学習できない学生が数多く出る現状解消を含む閲覧室のスペース確保、新たに自習室、AV室、公開講座や地域社会の文化交流の場としての視聴覚を含めた多目的研修室等さらには情報検索コーナーの増設やロッカールームの設置も考えています。この中には、レポート作成等のワープロやパソコンの設置も含まれています。

三つ目は、キャンパス情報ネットワークの整備にともなう情報図書館としての整備充実です。情報化社会におけるネットワークシステムは、図書館もさけて通ることはできません。図書館においても新しい情報媒体によるサービスは不可欠のこととなります。本年度内に学内LANが整備されますが、新しい技術を図書館が活用できるならば、利用者の皆さんに、より一層のサービスが可能となります。全学的な協力と支援のもとに、図書館も積極的に参画したいと思っています。

以上3つの夢を初春に描きましたが、正夢となるよう図書館委員会は、実現可能なことから早急に取組むつもりです。

学生諸君、図書館を本を貸りるため、勉強するために利用するだけでなく、「遊び心」で図書館に足を運んでくれることを期待しています。カウンターでお待ちしております。

# 退官された先生からのメッセージ

## 一 冊 の 本

松 岡 一 起

戦後の混乱期に青春時代を過ごした私は、学制改革の波をもろにかぶり、それまで通っていた中学校（旧制度）から地元の高等学校（新制度）に強制的に編入学させられた。当然のことながら、多くの友人とも別れ、勉学の意欲も落ち込んでいたように思う。授業の内容も既に習った事が多く、音楽教室にあるオルガンを触る日々が多かった。その頃、図書館がようやく整理され、何とか利用できる状態になった。閲覧室は珍しく和室で寝転ぶのに格好の場所でもあった。書架に並べられた本は古いものが多かったが、その中に新しい一冊の本が目止まった。三木清（戦前・戦中に活躍されたリベラルな哲学者）の『人生論ノート』であった。最初から難しい言葉の連続で理解することが容易ではなかった。読んでいるうちに西田幾多郎の『善の研究』の本を読まなければいけないということが分かって来た。

最近、新聞紙上で年代と読書傾向という記事の中に終戦直後の学生がよく読んだ本として哲学関係の書物があげられていた。今思えば、私も平均的な学生であったのかと思っている。この一冊の本から物の見方や考え方が変わって来たように思っている。このように、青春時代に読んだ本は今も鮮烈に頭の中をよぎっている。

## 今にして思うこと

中 谷 洵

学生時代はキャンパスも広く、余り気が付かなかったのですが、学校には図書館があり、あらゆるジャンルの図書が整備されています。小説にしても自分が好むもの、好まないもの色々取り揃えられています。その中から自分が興味あるものを選択できる素晴らしい施設です。しかもいくら借りても経済的な負担はありません。これを利用しない手はありません。自分であれこれ本を買って読んでみて、つまらないものに当たると、とても損をした気になりますが、図書館で借りたものであれば途中で嫌になれば返せばよいのです。私自身は親父がよく本を読み、周囲に沢山の本がありました。しかも、いろんなジャンルのものがあり、自分の興味あるものは大体揃っていました。その中でこれと思う著者にぶつかる徹底的にその人の本を読みあさりました。いま、私の家には図書室と称する部屋があり、8本ぐらいの書架に書籍を天井まで積み上げています。蔵書の数を数えたことはありませんが、余り本が多すぎたなお収容仕切れず、困っています。したがって、手元に置きたいものは各人の部屋に、当分読みそうにないものは倉庫に書架を並べて収容している始末です。これを図書館の本で済ませておれば、家はもっと広く使えたのにと反省しています。

## 「ゆとり」を読書に

木 村 伊 一

奈良高専が創立された60年代は「黄金の60年」と呼ばれ、日本の経済成長はめざましく、先進国に追いつけ追い越せと働きに働いた。この頃は学校も活気があって学生は勉強もよくし、図書館を利用する学生も多かった。学生会が映画会、スポーツ大会をやれば多くの学生が集まり、クラブ活動にも積極的であった。アルバイトで5年間の学費を納め、母の日にカラーテレビを贈って母親を感泣させた感心な学生もいたものだ。

そして「情報化社会」に急速に進んだ現在は、物質的にも豊かになり、生き甲斐、価値観も多様化してきた。60年代に求められた「猛烈」や「量」ではなく「ゆとり」と「質」が問われるようになった。そんな中で、高専の教育目標も中堅技術者像から問題解決型実践実技者像へと修正され、さらに解決型、開発型技術者像を目標とした専攻科が設置された。

皆さんはこうした情勢の中にいるということをよく認識して「ゆとり」の意義を考え直して欲しい。不可の数を数えつつ、ぬるま湯の中でテストをくぐり抜け、であってはならない。「ゆとり」をアルバイトに費やすだけでなく、クラブ活動や読書に十分活用させ、心身を鍛え、幅広い教養と工学理論・技術をしっかり習得して欲しいと希望するものである。

## 平成7年度 読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

図書館委員会が主催する恒例の読書感想文コンクールも20回を迎えましたが、今年度も国語科の協力を得て多数の作品が寄せられました。入選となつたのは次の6名の諸君の作品です。既に、冬休み明けの全校放送でその結果は発表されていますが、ここに改めて称賛の言葉を贈りたいと思います。

機械工学科2年	山本 隆久	『今日の宗教の可能性』を読んで
情報工学科2年	赤星 智子	『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を読んで
化学工学科2年	鎌田 愛	『塩狩峠』を読んで
機械工学科1年	佐々木美緒	『いいんですか、車椅子の花嫁でも』を読んで
情報工学科1年	瀬戸 絵美	『野火』を読んで
化学工学科1年	秦 幸子	『殉国一陸軍二等兵比嘉真一』を読んで

また、惜しくも入選とはなりませんでしたが、最終段階での入選候補として残ったのは、次の13名の諸君の作品です。これらにも、入選作に劣らない称賛の言葉を呈したく思います。

2M 田中 聡嗣	2S 中野 秀一	2E 津路 昌英	2I 巽 隆朗	2C 森尾さゆり
1M 酒田 浩司	1S 横山 智章	1S 山田 昌弘	1E 田中 弘導	1E 若林 秀幸
1I 向井 未来	1C 犬童奈緒子	1C 松田 優子		

上に挙げた他にも、良い作品がたくさんありました。それらの諸君の一人一人の名を挙げられないのが残念です。次回もまた、今年以上に力作が多数寄せられることを期待します。

**【寸評】** 入選となった6つの作品について、委員会を代表してコメントを付け加えます。

2M・山本君の作品は、宗教という難しい問題をテーマにした本を選んで、その最も肝心な所が理解できている点が評価できると感じます。文章的には少しぎこちない所がありますが、背伸びした表現をせず、自分の考えが述べられており、作文が苦手な人にもよい参考になると思います。

2I・赤星さんの作品は、文章も上手で、非常にまとまりの良い作品という印象です。欲を言えば、もう一步踏み込んだ自分の考えが書かれていてもいいのではと思います。

2C・鎌田さんは前年度に続いての連続入賞ですが、その間に、更に鎌田さん自身の成長していることがうかがえ、うれしく感じました。何より対象として選んだ作品が良かったと思います。そして、その重い問題をもった作品を、鎌田さんが自分の問題として見事に受け止めているということが、文章からありありと感じ取ることができます。

1M・佐々木さんの作品は、委員会での投票では最高点でした。感想文の書き易い本を選んでいますが、素直さが高く評価されたのだと思います。機会があれば、本格的な小説にも挑戦して下さい。

1I・瀬戸さんの作品は、『野火』という戦後文学の古典ともいべき作品に挑んだ点を高く評価します。「です・ます」調を採らず、感情的な感想にとどまらない論理的な文章で、非常に本格的な感想文に仕上がっています。今一度推敲を加えれば、更に素晴らしい作品になると感じました。

1C・秦さんの作品は、瀬戸さんと同じく戦争の悲惨さを訴えた小説を選んでいますが、その感想文の書き方は対照的で、自分の感じた所を無理せず素直に自分の言葉で書いており、それが好印象です。この重いテーマに、また来年度も挑戦してくれることを期待します。

(勢田)



## 入 選 作 品 紹 介

### 『今日の宗教の可能性』を読んで

機械工学科2年 山本隆久

今年、オウム真理教の事件が大きくとりあげられている。その中で、なぜ普通の若者がオウム真理教のような新興宗教に入信してしまうのかという報道が多かった。僕もなぜだろうと考えたけど、よくわからなかった。でも今まで生きてきた中で、これほど宗教について興味をもったのは始めてだった。宗教とはいったい何なのだろう？ そんなことを考えていると頭が痛くなってきそうだし、今までは、宗教と聞くとちょっと怪しい雰囲気があって、あまりかかわりたくなかった。そんな時、この本が家の片隅にあったので、半信半疑に読んでみた。うちの家は一応、浄土真宗らしいけど、どの宗教とどういうところが異なって、どういうところが同じなのか、僕には今まで全くわからなかった。この本を読んで、あらゆる宗教においても同じ部分がたくさんあるということがわかった。この本の著者は浄土真宗の人だったけど、宗教というとてもとらえにくいものを、いろんな角度から見つめていて、僕にも少しはわかるような気がした。

今まで宗教というものに対して矛盾を感じていたのは、人々の多くが都合のいいときだけ神様にお願いしたりするところだった。日ごろ小さな出来事や自分が今健康であることに対して、お礼も感謝もしないで、ここ一番ってときには手を合わせたりして、お願いをする。そんな時、神様って何だろう宗教って何のためにあるのだろう、と思ってしまう。そういう中でこの本を読んでいると、時々ドキッとすることがあった。

例えば、ハイデッガーという人が言うことに「死への存在」というのがある。これは、人間はいつか死ぬだろうということではなくて、つまり、いつかではなくて、始めから死ぬようになってい

るということだと言っている。死は遠い将来にやってくるできごとではなくて、死は生まれた時からスタートしているということで、死と生はいつも一緒であるということを行っている。これを読んだときはちょっと恐かった。そう言われてみれば若いからって、後何十年も生きられるわけでもない。明日死ぬかもしれないし、何十年後かもしれない。つまり、一歳の赤坊でも百歳のおばあさんでも死ぬ資格はまったく同等にあるということ。このことは今まで死ぬなんて考えたことのない自分にとっては、ちょっと恐くて、そして新鮮な感覚だった。

もう一つ驚かされたことは、自己はどこからどこへ行くのかということ、自己つまり僕自身どこからきたのか。「両親から生まれた」では答えにならない。では両親から生まれる前にどこにいたのかと言われると、「無かった」というのは答えにはならない。無かったものがどうして出てくるのかということになる。逆に死んだらどうなるのか。「墓へ行く」とか「骨になる」というのは答えにならない。骨になってどこへ行くのか、墓といってもそこからどこへ行くのか。自分の身体というものの終点かもしれないけど、自分そのもの、君そのものはどこへ行くのか。自分自身が存在する意味があるのか。あるなら一体何のために意志をもって生きているのか。そういうことを考えていると、自然に誰かに頼りたくなってしまおうと思う。それが宗教なんだと思う。だから、よくガンとかで生か死のときに医者が宗教に入っているかどうかを聞いて、その人に心のよりどころがあるのかどうかを聞いて告知するらしい。そうすると宗教はとても意味のあるものだと思う。

今、僕が宗教について考えられることはこのくらいのこと、難しいことはわからない。しかし、少しだけだけ宗教に対する疑問が解けてよかったと思う。

## 『ひめゆりの塔をめぐる 人々の手記』を読んで

情報工学科2年 赤星智子

私は、この本を読んでいる間ずっと、心が苦しく感じました。沖縄で戦争の被害にあった人々のことを思うと、今こうして平和な時代に、のんきに暮らしている自分が恥かしく、また、情けなく思えます。

太平洋戦争の末期、日本国土で唯一の戦場となった沖縄では、住民をまきこんで二十万人以上の犠牲者を出したそうです。その中で十六歳から二十歳までの若いひめゆり学徒たちは、従軍看護婦として戦争に参加し、その多くは命を落としてしまいました。十六歳から二十歳と言えば、今の私とちょうど同じ年齢です。今、私が彼女達の立場で戦争に参加しろと言われると、どうでしょうか。私にはきっとできないと思いました。それほど彼女達は強かったのでしょうか。私はそうは思いません。戦争の悲惨な状況が、彼女達をそうせざるを得ないように追い込んでいたんだと思います。奇蹟的に生き残った生徒の手記には、いくつか印象に残った部分がありました。一番印象に残っているのは、垣花秀子さんの手記の小さな男の子の話です。その男の子は、ヨチヨチ歩きで両親を探し、泣いていました。そして、両足を開いて銃口をかまえている米兵の片方のズボンにつかまり泣き続けたのです。垣花秀子さんは、邪険に米兵にけ飛ばされる男の子の無残な姿を思って目をつむったそうです。私も垣花秀子さんと同じようなことを想像しました。しかし意外なことに米兵はそうはしなかったのです。米兵は銃口はそのままにして温顔をほころばせながら、

「ドント クライ ベービー」

と、男の子をふり返り、まるで鼻歌でも歌っているようにリズムカルに優しくささやいたのです。この米兵の行動に、私の米兵に対する先入観が少し変わったのは事実です。

次に兼城喜久子さんをはじめ、多くの人の手記を読んで思ったことは、自決をした人があまりに

も多いということです。多くの人は手榴弾を持っていたし、壕では青酸カリの入ったミルクが配られたこともあったそうです。これは、いつでも自決できる環境です。捕虜になるくらいなら……と自決した人も多かったようですが、最後まで「生きたい」という気持ちを捨てず、わずかな可能性にかけた人の精神力は、とてつもなく強いものだと、私は思います。

壕での生活はどれほどつらかったことでしょうか。軍からの給与米はなくなり、自給しなければならなかった。また、危険をおかしてでも畑に出てイモを掘り、野菜をとりに行かなければならなかった。そんな彼女らのつらさや苦しさ、恐怖心は、きっと彼女らにしか分からないものだと思います。

私は、戦争と言えはよく耳にすることは、広島や長崎の原爆のことで、沖縄についてあまり聞いたことはありませんでした。その沖縄で起こった惨事を知ることは、現代に生きる私達の義務ではないでしょうか。今回私が知ったことも沖縄戦のほんの一部であって、実際はまだまだ広く深いことと思います。戦争体験が風化することは、平和を遠ざけることにつながっていると思います。だから、一人一人のこうした体験を湮滅させてはならないのです。

沖縄は一九四七年五月に日本の本土に復帰しましたが、現在でも基地は存在し、その機能はますます強化されつつあるそうです。沖縄県民は今でも核の脅威におびえているのです。こんな基地が存在し続けることは、あってはなりません。そして二度とこんな惨事が繰り返されないように、私達が子孫に事実を伝える番です。

## 『塩狩峠』を読んで

化学工学科2年 鎌田 愛

「塩狩峠」という本は、実話をもとにして書かれたと聞き、読んでみたいと思った。

この小説は、「永野信夫」という人の生きざま

を通して、「人間はいかにして生きるべきか」ということを教えてくれながら、クライマックスである「塩狩峠の事故」へと、私達を導いていく。

事故は突然おこった。塩狩峠の頂上に列車がさしかかった時、客車が離れ、暴走し始めたのである。この列車に、鉄道職員である信夫が客として乗っていた。その日が、長い間愛を育てて来たふじ子との結納の日だったからだ。声もなく恐怖に怯える乗客。信夫は飛びつくようにハンドブレーキに手をかけた。しかし列車は止まらない。信夫ははとっさに判断する。今の速度なら、自分の体でこの車両を止めることができる。私には信じられない判断だった。そのまま暴走すれば、列車は間違いなく転覆し、多数の死傷者が出るだろう。信夫も死ぬかも知れない。でも、生き残れるかも知れないのに信夫は線路めがけて飛び下りた。自分の確実な死とひきかえに、乗客全員の命を救うために……。彼はクリスチャンだった。生前、ふじ子に語っている。

「ぼくは毎日を神と人のために生きたいと思う。いつまでも生きたいのは無論だが、いついかなる瞬間に命を召されても、喜んで死んでいけるようになりたいと思いますね。」

信夫は、自分の信念を実行したのだと思う。口だけならどんなことでも言えるけれど、実行するのは難しい。まして、命をかけることを。わからなくなった。そんなにも簡単に、命を捨てれるものなのか？ 確かに、信夫の生きざまは、私なんかと比べて清く正しく美しい。迷いや、自分を責めることはあっても、いつも他人の気持ちになって、歩んでいるように思える。他人に対する愛が、彼にこの行動をとらせたのか？ 彼を愛する人達も、彼の死を嘆き悲しむが、やがて彼への賛美にかわり、彼を憎んでいた人も彼が口だけの人ではなかったことがわかる。彼の死で彼の「愛」がわかったのである。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん」

本の中の聖書の言葉が、私の頭の中を駆け巡る。一粒の麦が死んで、たくさんの実をみのらせたの

である。

本が、私に問いかけてくる。「あなたは、誰かのために死ぬるか」——家族を思い浮かべた。彼らの一人でも失うことは辛いことだ。彼らのためなら、ひょっとしたら、死ぬるかも知れないと思った。が、信夫のような死は。多分、今の私にはできないだろう。「あなたは、誰かを自分以上に愛せるか」——再び、本は問いかけてくる。やはり、わからないとしか答えられない。でも、できるなら、人を愛して行きたいとは思った。誰もが、自分を愛するように人のことを愛し、思いやれば、愛の輪はどんどん広がって、町を、国を、地球までをも変えてしまうだろう。新聞のどこかに、戦争の記事を見る毎日。自分だけのことを考えずに、もっと人のことを思いやれたら、争いなんておこらないだろう。

信夫のような人が本当にいたなんて、人間も、まんざら捨てたものでもないかも知れない。読み終わった時、涙と共に、自分が少し変わったような気がした。私にとって、かなり重いテーマだったけれど、この本を、もっともっとたくさんの人に読んで欲しいと心から思った。

## 『いいんですか、 車椅子の花嫁でも』を読んで

機械工学科1年 佐々木 美 緒

感想文を書きやすくするために、私は、この本を読みながら、小さな紙切れを良い所にはさんでいきました。そして読み終わってみると、ほとんどすべてのページに紙をはさんでいたことに気付きました。この本は、障害児教育をなさっている女性が書いたもので、その仕事での体験が素晴らしい言葉でつづられていました。うまく言えないけれど、私は、少し成長できたような気がするのです。

私は、半年程前に、西の京に引っ越してきました。西の京には、「たんぼぼの家」や養護学校などの施設があります。そのせいか、駅やバスの中では障害を持っておられる方によく会います。私

は正直言って、障害者の方に、どう接すればいいのか分からず、逃げ腰な考え方でした。幼い頃は、素直に優しい気持ちが持っていて、いたわり、だけど特別に見たりもせず、同じ高さでいたと思います。けれど、少し大きくなると、優しくすることが、自己満足で、高い位置から見下しているように思えたのです。恥かしいけれど、どうせその人の気持ちになることはできないと考えていました。この本に出てくる障害児と交流学習をしている子供達は自然なやさしさの持ち主でした。等しく共に生きている、まさしくそういう感じです。傷つけないようにと甘やかすのではなく、厳しい言葉だって口にできるのです。残念ながら、私には、行動できる勇気もありません。

すごく考えさせられた事は、「あたりまえさ」についてでした。まずは健康面のことです。私達が体が動くのはあたりまえのことです。でも、障害者にとっては、地に足をつけて立つことも、しゃべることも、あたりまえではないのです。私達の健康という「あたりまえさ」は「かけがえのなさ」だったのです。私達は、何でも満たされているあまりに、日々なんとなく過ごしているけれど、体の不自由な方は一日一日踏みしめながら生きている。次は人生のことです。この本の中に「もしも…」というのがありました。それは、女の子は、ウェディングドレスを着て、舞台を車椅子や松葉杖で横切り、男の子は背広を着てサラリーマンになり歩くだけの劇です。「もしも…」という題に心臓をさされました。決してあり得ないことだけれど、もしも許されるならという気持ちなんです。私達はやがて、働きに行き、そして結婚もあたりまえにするでしょう。なのに、彼や彼女達にとっては、あり得ない夢物語だということです。クリーニングの職を得ることのできたある女の子が、数ヶ月後にその職場を辞めなければならなくなるという話がありました。バスと電車で通っていた彼女は、ラッシュの中、他の人のセットした髪にさわるまいと緊張し、でも彼女の意志とは関係なくもちあがってしまうのです。健常者しか生きれないしくみになっている世の中を生きろというの

は、海の中で私達が生活するぐらいしんどいことだろうと思いました。そして、彼女は、歩いて通勤することを決心したのですが、汗さえもぬぐえない手、汗をかかないよう水分をひかえ、脱水症状での辞職だったのでした。なぜ、彼女達がそこまでまわりに気を使って生きなければならないのですか。彼女達を見る世の中の目がそうしたのだと思います。彼女達は就職さえできないというのに、よりよい仕事を求めている自分は何様なのだろう。彼女達は何も求めていない、ただ一人でトイレに行きたい、ただその程度のことだけなのです。

この本から得た物は多すぎて、とても言いきれません。自然なやさしさというのは考えて出てくるものではなく、その人の身になり心になれば答えはすぐ出てくると思います。彼女達は、あわれみなんか欲しくはない、幸せを見つけ障害を生きているからです。私はどっぷりつかってしまわずに、精一杯生きたいと思います。この本に出会えて、確実に大きくなりました。感謝しています。

## 『野火』を読んで

情報工学科1年 瀬戸絵美

“人間”という生き物の愚かしさを、最も忠実に映しているもの、それは“戦争”であろう。戦後五十年を迎えた現在も、世界のどこかでその愚かな争いは続いている。人間はもっと知恵のある生き物ではなかったのか。こんな時代が続く限り、過去に“戦争”によって命を奪われた罪なき人々の魂は、どうして浮かばれようか。

—死ぬんだよ。それが今じゃ、お前のたった一つの御奉公だ。—日本の敗戦が確実にやってきた頃、戦場の一つ、フィリピンで、肺病を煩い、“ただの役立たず”となった彼—田村一等兵が、分隊長から受けた最後の言葉が、これだった。悲しいことに、戦時中にこのような言葉を投げつけられるのは、ごく普通のことであつたのだろう。しかし、ここで野垂れ死んで、何が“奉公”なの

だろうか。もしもそれが、国の為の“奉公”であるというならば、少なくとも、生きて、生きて、そして故郷へ帰り、国の再建に尽くすこと、それが本当の“奉公”なのではないのか。

この様に、私達のような、“戦争”を知らない者にとしてみると、到底理解できない考え方が、その時代の“正”であり、“道理”であった。それが真実だということを、私はこの作品に教わった。

生あるものにとって、“死”は絶対的な存在であり、“生”の最終目的は“死”であるとも言えるだろう。ならば、人間は、その“死”に直面した時、それをただ受け入れ、そして待つのか。

しかし、そうならば、私はこの『野火』という作品は存在しなかったのではと思う。人間は、どこかで“死”の絶対性を認知しながらも、それと共に、本能とも言えるべき“生への執着心”を持ち合わせているらしいからである。もしもその本能がなければ、比島の地をただ一人（誰かと一緒に行動したことも何度かあったけれど、本当の意味では、彼はずっと“一人”だったのだと思う。）さまよい続け、その間に、やむなくではあるが、彼が犯した罪、それに追いつめられ、自分を責めながら、それでも自らの“意志”のみにより、生きようとしただろうか。

我が身を護る為に、殺してしまった比島の女、自らが生き延びる為に食した肉…仲間が差し出した猿の肉…恐らくは人肉、それらの逃れようとしても決して逃れることの出来ない罪を少しでも忘れようと、彼は自らを「狂人」としたのではないだろうか。

それでもやはり、もともと田村一等兵という人物は、ごく一般の、人間らしい心を持った“人間”なのである。それ故に、大戦が終わり、世界が新しい一歩を踏み出した後も、彼は、彼自身の“第二の人生”へ踏みきることが出来なかったであろう。

私は、今までに何冊もの、戦争に関する文学作品に出会った。そして、その中でも特に私の心に残ったものは、戦火の中を強く生きて行く少女の話でもなく、戦争によって消えた、多くの命の悲

しい物語でもなく、窮地に立たされた人間の、恐らくありのままであろう姿を映した、この『野火』だった。

今、世間で謳われている“平和”は、きっとまだ遠いだろう。たとえ私達が“戦争”についての知識を得ても、戦争の本当の恐ろしさは、その時代を生きた人にしかわからないし、誰が何に謝罪をしようとも、戦争によって狂わされた人々の人生は、戻らない。けれども、“戦争”の愚かさ、虚しさを、それにまつわる哀しい真実を、後世に語り継ぎ、少しずつでも本当の“平和”を築き上げて行くことが、私達に託された使命であり、戦争によって命を奪われた多くの人々への、ささやかな鎮魂歌となるのではないかと思っている。

## 『殉国—陸軍二等兵 比嘉真一』を読んで

化学工学科1年 秦 幸子

戦争は人の心までも変化させてしまう、これがこの本を読んだ後の気持ちでした。主人公。真一は負傷者を陸軍病院壕に運ぶ仕事をします。多くの負傷者や死体に接したあまり、いつの間にかそれらに、何の感慨も抱かないようになってしまったのです。死体をただの動かなくなった物体ではないというのです。そして友人の死までもが物としか思えなくなってしまうのです。更に死体以外、つまり生きている人に対しても気持ちが変わるのです。助けを求める負傷兵に対し、生死にかかわるような嘘をつき、別の負傷兵に水をわけるとを惜しく感じ、そして、その兵が死んでしまい水をわけずにすんだことに安堵するのです。しかし、一番悲しかったことは、母親の死体から乳を吸っている嬰兒を連れていこうとするのですが、真一には食糧も水も与えられないし、どうせ死ぬ運命だと思い、そうした運命にあるものを抱いてゆくのは「無駄な行為」に思えたということでした。確かに死んでしまうかもしれないけれど、無駄に思えてしまうのは、人の心を持たなくなってしまうからだと思います。そして、このような人々

をつくり出したのが戦争であり、戦争を起こした人々の責任なのだと思います。

もう一つ恐ろしく感じたのは死を望む気持ちです。兵士はたとえ中学生であろうと戦死を望んでいます。また女性や子供達は自決を望むのです。普通なら、死にたくない、生きていたいと思うはずなのに、人々は死ぬことが国のため、まさに殉国を思っていたのです。今の私達から見れば、それはとてもばかげたことであり、信じられないことです。命は国のものではなく自分のものという事を忘れてしまわせた戦争は一体だれのためにあったのか、また何を意味するのか、不思議です。

そして、何より悲惨なのは陸軍病院壕ではないでしょうか。雨が降れば、泥沼となり、負傷兵は増す一方で、中に入れず外に寝かされ、包帯の数も、看護する女生徒の数も足りず、傷口は膿み、おびただしい蛆が湧き、悪臭が漂うゾッとするような空間で、負傷者は苦しみ死んでいくのです。そして最後には、敵が来るため歩ける患者だけを連れて逃げるのです。残った重傷患者は青酸カリの入ったミルクを飲まされ集団自殺をさせられるのです。そして彼らは、自分達の運命を知り、最後まで看護してくれた女生徒に対し感謝の言葉をかけるのです。それは悲しく、残酷な時だったと思います。しかし、彼女達も次々と手榴弾

で自殺したり、投身自決などで命を捨てるのです。誰もが捕虜となる事を恥とし、自殺したのです。しかし真一は、最後に捕虜となってしまいます。その後彼がどうなったかはわかりません。しかし、決して幸せではなかったと思います。殺されたかもしれません。このように戦争とは、人々を不幸にするだけなのです。その不幸な戦争を起こしたのが「人間」なのです。結果として日本は広島・長崎に原子爆弾を落とされ負けました。私は負けて良かったと思います。勝っていればまた戦争をしていたと思うからです。負けて初めて人々は大きな過ちに気付いたのでしょう。それに気付くのがもう少し早ければ、多くの命が救われたに違いないはずです。今年には戦後五十年です。まだ世界には本当の平和は訪れていません。多くの核兵器、ミサイルなどがあります。それらが二度と使われないためにも、日本が世界に向けて反戦を呼びかけるべきです。人々の心の中に、「殉国」を望む気持ちが二度と起こらないためにも…。五十年前、子供達までもが戦争に参加し、命を落とした戦争は、今後起こらないとは限らないのです。起こりそうになった時、それを止める事のできる人間が多く存在しなければならぬ、それがこの本の意味することなのだと思います。

## 寄贈図書リスト

書名	著者名	寄贈者名
中將姫物語	松原一夫	本校職員 清水美代氏
この国のかたち(四)1992~1993	司馬遼太郎	本校事務部長 森口節之氏
日本再生の処方箋Ⅳ 規制撤廃が切りひらくもの	田中直毅等	経済広報センター
Daikokuya Kodayu 船頭 大黒屋光太夫	都築正則	鈴鹿高専教官・都築正則氏
奈良県教育百二十年史	奈良県教育委員会編	奈良県教育委員会
奈良県教育百二十年史(資料編)	奈良県教育委員会編	奈良県教育委員会
モンゴルの旅(付・最新モンゴル事情)	モンゴルタイムス日本支局編	本校事務部長 森口節之氏
奈良一心のふるさと(奈良案内書)	奈良市	奈良市
ラベンダー物語(写真集)	渥美頭二	本校教官・工藤英男氏
移动通信システムガイド'96 陸上移动通信のすべて	移动通信研究会編	移動無線センター
秋ざくら 一滴・文子遺句集	岡田英雄、岡田都(編)	元本校非常勤講師・岡田都氏
財団法人大和文化財保存会収蔵品目録・陶磁器編 赤膚焼(平成7年度版)		大和文化財保存会
奈良県議会史(第二巻)	奈良県議会史執筆委員会編	奈良図書館協会
花ひらく ならの女性生活史	ならの女性生活史編さん委員	奈良県
提灯(ちょうちん) 伝統産業技術保存記録	今中和義等編	本校事務部長 森口節之氏
奈良人形一刀彫 奈良県伝統産業技術保存記録	今中和義等編	本校事務部長 森口節之氏
奈良の墨	松井藤次	本校事務部長 森口節之氏
奈良墨 奈良県伝統産業技術保存記録(平成6年度)	今中和義等	本校事務部長 森口節之氏
夢 半世紀一写真が語る宝くじ50年史	第一勧業銀行	本校学生 青柳倫太郎君
転がり軸受け(新版) 機械要素活用マニュアル	光洋精工KK編	光洋精工KK

(平成7年6月~平成8年1月)

## 読書週間—戦後50年、日本の 今を考える—を振り返って

図書部会長 井村 榮 仁

本校には、「人権週間」や「交通安全週間」などいくつかの「・・・週間」があります。このうち図書館委員会の守備範囲にあるのが「読書週間」で、10数年前から定着しています。

年度ごとにそれぞれふさわしいテーマが採択されてきたので、今年度の場合も当初の図書館委員会において読書週間の議題が出たときには、正直なところ少々心配した。

幸いこの行事の主査を機械工学科の岩井委員が担当することになり、何ヶ月か後の委員会に表記のテーマではどうかという提案がなされたとき、内心ほっとしました。

実際、いままさに戦後50年であり、日本だけでなく世界の各地でこれに関連した式典や行事が実施されていて、まことに時流に沿ったテーマであると思えたからです。

しかし、問題は一般教科（国語科）の勢田委員の指摘があったように「読書週間」を足がかりにいかにして学生諸君に読書への啓蒙ができるか？という点であった。どのようにすれば学生諸君がまず読書コーナー（以下コーナーと略記）に目を向けてくれるのか？はたして我々大人が設定したテーマに興味を持ってくれるか？勢田委員が専門家の立場から十分なキャリアをもとに作成した小冊子を彼等はどのように意識または利用するのか。

しかし、三人寄れば文珠の知恵と言うように上記の岩井主査や電気工学科の山内委員らが視覚によって学生をコーナーに引き寄せようと思いつ

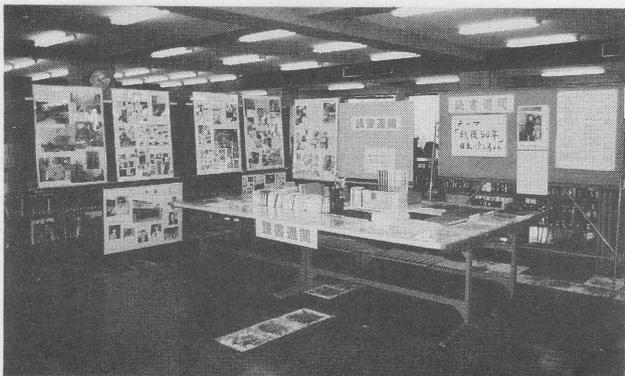
いた。写真等の選定では山内委員の得意とするところで、1945年（昭和20年）から1995年（平成7年）までの10年ごとの主な出来事（その時々ブーム、事件、政変、人類の成し遂げた偉業、ビッグイベントetc…）をパネル編集し、同時に奈良高専の変遷を示す各科のアルバムを利用することでコーナーへの学生の誘引を意図しました。

次に戦後のベストセラーの中から約50冊ほどの書籍をベテランの図書館職員の皆さんに選定して戴き、他方では学内各所への提示をするため、中和田図書館長による学生図書委員会への働きかけで、手描きのポスターが作られました。

このような御膳立てのもとに全体のレイアウトを岩井委員と私とで考え、10月27日に中和田館長、阪部視聴覚部会長、大植紀要部会長を含む図書館委員、職員とでコーナーの完成ができました。

思うに一つの行事を実施するとき、終わってしまえばそれまでだが、計画・準備段階では多くの人々の手をわずらわす。当然読書週間の効果がどうであったか気にかかる。期間中何度かコーナーに注目していたところ、写真やアルバムに目を向けている学生は幾人ともなくみかけました。目標の一つはうまくいったわけです。けれども、学生諸君の読書に対する意識をどの程度高揚できたのかについては、残念ながら我々の期待通りにはいかなかったように思います。

さて、学生諸君！あなた方はどうでしたか？テレビ・ビデオやインターネットなどのメディアから入ってくる情報も大切ですが、じっくり味わえば心の奥底から考えさせられる書物もあるわけです。どうか、比較的自由な時間の持てる学生時代に読書することを今一度考えてみましょう。



# ブックハンティングの謎

情報工学科3年 橋本竜也

年に2回、図書委員（部外者も多いが）の趣味が爆発する日がある。それがブックハンティングの日です。図書館の「新着図書」のコーナーに、怪しげな本が並んでいたら、それはきっと、ブックハンティングの成果に違いないでしょう。マニアックな本や低俗な本など、およそ学校図書館にふさわしくない本が買われがちだというのが、学生の間で評判らしいです（友人談）。そんな本が買える機会があるということは、非常に貴重なことじゃないかと思えます。今回購入した本も、御多分に洩れず、濃い本が多いです。ひょっとすると、ブックハンティング史上最も濃くないんじゃないかとも思えます。ファンタジーやホラー、DTM (Desk Top Music) 専門書、果ては競馬の本まで、よくもまあ「きつつい」本が揃ったものです。ごめんなさい。でも、その分読みがいのあるものを買集めたつもりです。そんなわけで、暇つぶしにでもいいから図書館に来てみて下さい。ついでに、何か借りてって下さい（その時ブックハンティングで購入した本を借りてくれると嬉しいです）。ちゃんと返して下さいね。漫画本を読むのも面白いんですが、たまには小説の世界に足を踏み入れるのもまあ悪くないと思えます。そこで、「こんなくだらねえ本を買ってくるなら、俺に買わせろ！！」と思ったら、次回のブックハンティングに殴り込みを駆けてきて下さい。たぶん、歓迎されると思えます。

## ブックハンティング購入リスト

食品の研究 アメリカのスーパーマーケット  
元禄心中記 (天の巻)、(地の巻)  
そういうふうにはできている  
それでもいいと思ってる  
心のおもむくままに  
快楽殺人の心理 FBI心理分析官のノートより  
公安警察スパイ養成所  
らせん Rasen  
診断名サイコパス 身近にひそむ異常者たち  
喜びの秘密  
催眠術完全マニュアル あなたも催眠術師になれる！  
完全犯罪捜査マニュアル  
誰も教えてくれない 完全ムショ暮らしマニュアル  
図解 中毒マニュアルPart 2  
最新 競馬データよくぞここまで 劇的に勝率アップする馬券作戦  
銀色のフレイレンツェ メディチ家殺人事件 朝日文芸文庫  
グイン・サーガ外伝7、9 ハヤカワ文庫  
龍の契り  
ボクは、声優。  
アーミッシュの贈り物 ペンシルバニア・ダッチ・カントリー  
対局する言葉 羽生V. S. ジョイス  
試して覚えて確かめる 乙種第四類危険物取扱者に合格する本  
楽典 音楽家を志す人のための (付=音大入試問題と解答)  
松本  
妖魔夜行 悪魔がささやく 角川スニーカー文庫  
ルナル・サーガ1〜6 角川スニーカー文庫  
モロイ MOLLOY  
犬たちの隠された生活  
図解 完全武装マニュアル トカレフからスタンガンまで  
ザ・ホーン&ストリングス・プログラミングス  
日本陸軍指揮官総覧  
黄落 (こうらく)  
名づけえぬもの L'innommable  
マロウンは死ぬ Malone dies  
犠牲 サクリファイス わが息子・脳死の11日  
女文士  
妖魔夜行 真紅の闇 角川スニーカー文庫

## 著者名

ステートン著 北濃秋子訳  
栗本 薫もこ  
さくらもこ  
木根尚登  
タマロー著 泉典子(訳)  
レスラー著 狩野秀之(訳)  
島袋修  
鈴木光司  
ヘアー著 小林宏明訳  
ウォーカー著 柳沢由美子(訳)  
武藤安隆  
小野一光  
北代可  
暮らして潜む危険を考える会  
一戸秀樹  
塩野七生  
栗本薫  
服部真澄  
野沢雅子  
ダンクル著  
羽生善治、柳瀬尚紀  
危険物取扱者合格指導会  
菊地有恒  
松本人志  
水野良、白井英、山本弘  
友野詳  
ベケット著 安堂信也訳  
トーマス著 深町眞理子(訳)  
銃器問題研究プロジェクト編  
篠田元一監修  
新人物往来社編  
佐江衆一  
ベケット著 安藤元雄訳  
ベケット著 高橋康也訳  
柳田邦男  
林眞理子  
友野詳(等)

## お知らせ

### ☆学年末休業中の図書館利用について

- ・開館日時 3月19日(火)～4月2日(火)  
8:30～17:00まで  
土・夜間開館はありません
  - ・閉館日 4月3日(水)～4月5日(金)  
館内整理、新年度準備のため閉館
  - ・貸出冊数 6冊 3月13日(水)より貸出
  - ・返却日 4月8日(月)までに返却
- なお、卒業予定者は卒業式当日までに必ず返却して下さい。また、図書を紛失した場合は、図書館カウンターで御相談ください。  
☆図書館カレンダーを作成して、カウンターに置いてあります。御利用ください。

## 編集後記

本年度退官されました松岡・中谷・木村先生から心のこもったメッセージを頂きました。年末のご多忙のところ、快くご執筆を頂きましてありがとうございました。また、館長からはこの4月から実施します「図書館の一般市民開放」の紹介をまじえて初春の夢を語って頂きました。

奈良高専を巣立っていかれる学生も、図書館を忘れずに思い出したらいつでも訪れて下さい。

(委員一同)